

平成 10 年度滑川市埋蔵文化財発掘調査概報

1999年3月

滑川市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、県補助を受けて実施した、平成10年度の富山県滑川市内における埋蔵文化財発掘調査の概要調査報告書である。
- 2 調査事務局は、滑川市教育委員会生涯学習課に置き、主任宮本幸雄および学芸員野末浩之が調査事務を担当し、生涯学習課長本田孝清が総括した。発掘調査は野末が担当して実施した。
- 3 発掘作業員は街滑川市シルバー人材センターの協力を得た。
- 4 出土遺物の整理、本書の執筆・編集は調査担当者が行った。
- 5 調査に係る出土遺物、図面・写真等の記録は滑川市教育委員会が保管している。

目　　次

I 上梅沢館跡	2	V 寺町遺跡	5
II 上小泉西遺跡	3	VI 魚躬遺跡	6
III 森野新館跡	4	VI 千鳥遺跡	11
IV 上梅沢遺跡	4		

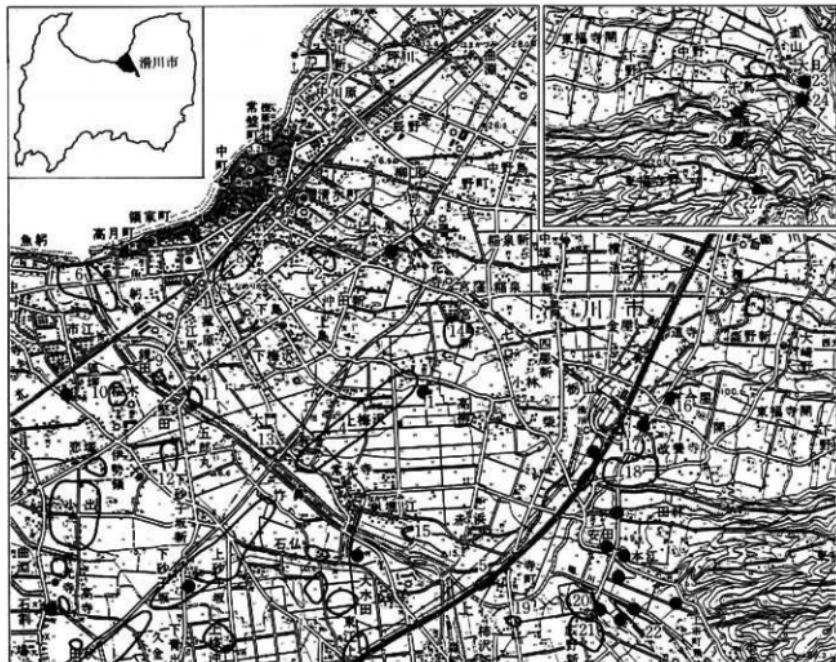


図1 調査遺跡および周辺の道路 (1:50,000)

- 1 上梅沢館跡 2 上小泉西遺跡 3 森野新館跡 4 上梅沢遺跡 5 寺町遺跡 6 魚躬遺跡 7 千鳥遺跡 8 下島遺跡
9 銀田遺跡 10 狐塚遺跡 11 江尻遺跡 12 小池遺跡 13 有金館跡 14 HS-06 遺跡 15 堀江城跡 16 東金屋製鉄跡
17 藤山遺跡 18 安田古宮遺跡 19 柿沢新遺跡 20 本江遺跡 21 広野新南遺跡 22 砂林開北遺跡 23 猛の内遺跡
24 大日遺跡 25 東福寺尼敷遺跡 26 東福寺焼窯跡 27 不水掛遺跡

I 上梅沢館跡

1 遺跡の位置と環境

上梅沢館跡は滑川市上梅沢地内、早月川扇状地扇尖から扇端部にかけての僅かに西に傾斜する地形上に位置し、現在周辺は田園地帯が広がっている。当地を含む旧梅沢村は中世堀江莊を構成する一村である。遺跡は現在の光明寺境内および周辺に比定され、光明寺境内の東西境界あたりには今なお土塁の一部が残っており、典型的な中世の平地式方形単郭居館と見られる。文献資料では、やや南北が長いがほぼ方形に土塁がめぐり、さらにその外側に堀跡もあったと伝えている。土塁の外側の堀跡とみられる部分は、明治期の地籍図でも確認できるが、現在は水田・道路・墓地・宅地となっており判然としない。館主については、当地的1.4km南に所在した堀江城を中心に勢力をもつた土肥氏の一族とも考えられる。



図2 上梅沢館跡 調査位置図 (1:10,000)

2 調査経過

調査地は滑川市上梅沢336、光明寺の北側に位置している。当地は平成9年度に個人住宅建設に伴い事前の試掘調査を実施し、その結果、堀跡など館内外を区画する遺構は検出されなかったが、古代末から中世にかけての可能性のある井戸跡1基が見つかっていた。この結果を受けて、遺構が存在しない地点への建築計画変更の協議・調整を行い、やむを得ない部分について、改めて記録保存を前提とした本調査を実施した。調査は平成10年5月11日に滑川市教育委員会が行った。

試掘調査において、表土直下に遺構が存在することが判明していたため、重機(バックホウ)で表土層を除去し、以後人力により遺構精査し、遺構および遺物の遺存状況を記録した。

3 遺構・遺物

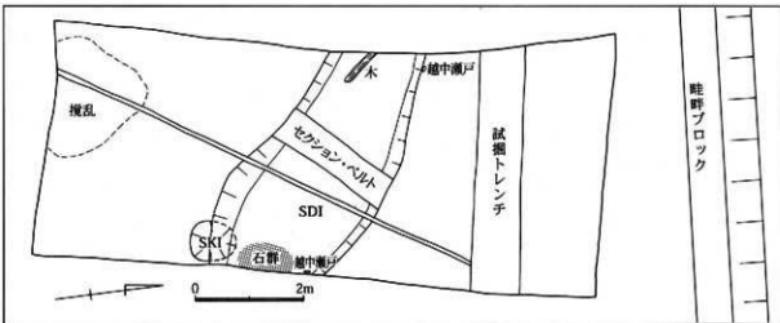


図3 上梅沢館跡 遺構図 (1:100)

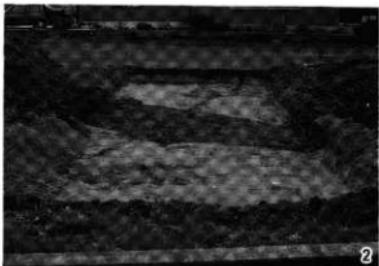
表土直下で溝(SD1)と土塁(SK1)を検出した。黄白色砂層から掘り込まれている。SD1は南東から北西に延びる幅約2.5m、深さ約20cmの溝である。調査区南東でSK1を切っている。また、細くまっすぐな枝を2~3本並べた、幅約10cmの暗渠状の溝が南東から北東に延び、SD1に直交するように切っている。SD1では、北西隅で長70cm以上の木片が出土したほか、礎に混じって珠洲瓦片、越中瀬戸皿片が1点ずつ出土している。SK1は直径約80cmの袋状の土壤で、深さは涌水のため完掘できなかったが50cm以上ある。遺物は表土直下から越中瀬戸片が出土している。

4 小結

今回の調査では、前年に出土した井戸跡に間違した遺構や年代を裏付ける資料の出土が期待されたが、調査の結果は、近世以降と思われる溝と性格不明の土壙が検出されたのみであった。したがって、直接上梅沢館跡と間違した遺構とは考えられない。井戸跡の年代や遺跡の範囲、井戸跡と鉢跡の相関等について、改めて再検討する必要がある。



上梅沢館跡 1 調査地近景 2 遺構



II 上小泉西遺跡

1 遺跡の位置と環境

上小泉西遺跡は早月川扇状地扇端部、標高約9.5mの地点に位置する遺跡である。地形的には西に緩やかに傾斜しており、現在、扇状地上は早月川から分岐した中川等のいくつもの小河川が富山湾に向かって西流している。当遺跡付近には祇園田に由来すると伝えられる行田（ぎょうでん）公園が付近にあり、中世堀江荘を経営した祇園社との関連が窺える。

当遺跡を含む上小泉地内は、市街地周辺部ということもあり、近年は開発事業が多くなっているところである。昭和61年から平成6年にかけて土地区画整理が施工されているが、埋蔵文化財関係の調査は実施されていなかった。平成9年11月に開発事業に伴い周辺地域の事前遺跡分布調査を実施した結果、新規発見された遺跡である。同月に実施した試掘調査において、炉跡と考えられる遺構や須恵器・土師器の良好な一括遺物が出土している。



図4 上小泉西遺跡 調査位置図 (1:10,000)

2 調査経過および結果

調査地は滑川市上小泉571・577番地で、上小泉西遺跡推定域の南東端にあたる。平成9年の試掘調査地点の南東約240mの地点で、現状は周辺を含め水田である。4区画の宅地造成に先立ち、平成10年7月21日に滑川市教育委員会を調査主体として事前の試掘調査を実施した。調査は重機（バックホウ）で遺構面まで掘り下げ、人力により遺構精査し、遺構および遺物の遺存状況を記録した。対象地内に4つのトレンチを任意の位置に設定した。層序は①層：表土（耕作土）、②層：灰褐色土、③層：暗黄褐色土、



上小泉西遺跡 調査地全景

④層：暗青灰色シルト（地山）となっており、部分的に地山上に薄い灰黑色土を挟んでいる。遺構は3・4トレンチ表土直下において、灰白色砂の覆土で幅約30cmの溝1条を検出した。遺構からの遺物の出土はなかった。この他は1トレンチにおいて表土直下から珠洲片1点が出土したのみであった。

III 森野新館跡

1 遺跡の位置と環境

森野新館跡は、滑川市森野新に所在する中世城館跡である。早月川扇状地を見おろす旧扇状地である台地「加積山麓階」の末端部に位置する。北および西側は扇状地域から約10m高い段丘状となっており、東に向かってなだらかに高くなっている。遺跡推定地の中央を、東西を横切るように県道大浦・大槻線が通り、西方の段丘手前で掘り切りながら扇状地部へと続いている。当地には「館中」という小字名があり、また、かつて遺跡北側の東西方向および西側の南北方向に土塁の一部が残っていたが、圃場整備で消滅したという。

『文政元年新川郡上申帳』に、鹿熊城の家老が居住していたとの伝承がある旨の記載があり、鹿熊城（松倉城）の出城かと推測されている。

2 調査経過および結果

調査地対象は滑川市森野新7番地で、車庫兼倉庫および駐車場の建設に先立ち、平成10年9月25日から9月28日にかけての延べ2日間にわたって、滑川市教育委員会を調査主体として事前の試掘調査を実施した。当地は、遺跡推定域の西側にあたり、県道を挟んで南側にある八幡社敷地の一角などにかつて土塁の一部が存在したとの話もあるが、圃場整備によりかなり地形が変貌してしまったという。標高は約100mで、現状は田および畠である。

調査は重機（バックホウ）で遺構面まで掘り下げ、人力により遺構精査し、遺構および遺物の遺存状況、土層堆積状況を記録した。今回の調査では、当地の南にかつて存在したという南北方向の土塁の延長あるいは周濠が検出される可能性があるため、対象地に東西にトレンチを3本設定した。トレンチ東側では表土下すぐに黄橙色ローム層が現れ、西側についてはロームと暗灰褐色土の互層となる盛土層を挟み地山ローム面に至る。この落ち込みの深さは表土から約1.2m～約1.5mであった。落ち込みは、層位に自然堆積が見られないなどの状況から、直ちに館の周濠とすることはできないものと思われる。また遺物の出土もなかった。

森野新館跡 調査地全景

IV 上梅沢遺跡

1 遺跡の位置と環境

上梅沢遺跡は、早月川扇状地の扇端部付近から上市川の自然堤防地帯に至る地域に位置する。現在の遺跡の推定範囲は、北東は標高約15mの上梅沢集落から南西は標高約10mの有金集落までの幅約300m、延長1.5kmにわたり細長く延びており、面積は約45万m²にも及ぶ。遺跡の種別は古代・中世の遺物散在地である。周辺は圃場整備が済み、

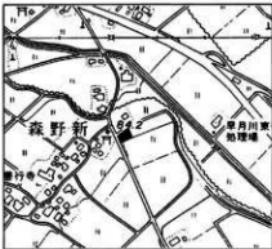


図5 森野新館跡 調査位置図 (1:10,000)

整った区画の水田が広がる。東方数百mには中世城館である上梅沢館跡が存在している。

当遺跡中西部では、これまで2度、宅地開発に伴う試掘調査を実施しており、その結果、一部に近現代と思われる溝等が存在するものの、浅い表土(耕作土)の下は、基本的に厚い砂礫層が堆積している状況が確認されている。

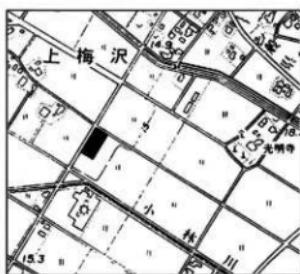


図6 上梅沢遺跡 調査位置図 (1:10,000)



上梅沢遺跡 調査地近景

2 調査経過および結果

調査対象地は滑川市上梅沢155-1番地ほかで、上梅沢遺跡推定域の東部境界上にあたる。現状は休耕田である。4区画の宅地造成に先立ち、平成10年10月16日に滑川市教育委員会を調査主体として事前の試掘調査を実施した。

調査は重機(バックホウ)で造構面まで掘り下げ、造構および遺物の遺存状況を確認、記録を行った。対象地の北側から調査を開始し、南側へ進行していく計画であったが、トレンチを3本調査した時点で、造構・遺物とも出土せず、また土層堆積状況からも遺跡内には当たらないものと判断して調査を終了した。

V 寺町遺跡

1 遺跡の位置と環境

寺町遺跡は、滑川市の南部、上市川支流の郷川と平塚川に挟まれた扇状地上に立地する古墳時代から中世にかけての複合遺跡である。当地は、約500m西に上市川と郷川、平塚川の合流地点があり、氾濫をたびたび受けている地域である。当遺跡は、北陸自動車道建設に先立つ分布調査により発見された遺跡で、昭和54年には発掘調査が実施され、15基の井戸と平安時代から中世にかけての遺物が出土している。



2 調査経過および結果

調査対象地は滑川市寺町57番地で、寺町遺跡推定域の北側境界部分にあたる。北陸自動車道に隣接し、昭和54年の発掘調査地の北西約50mに位置している。標高は約16mである。扱い手育成基盤整備事業(高度利用型)による既設農道の舗装および農道に並行する農業用水路の改修工事に先立ち、事前の試掘調査を実施した。調査は、富山県魚津農地林務事務所の依頼を受け、平成10年10月30日に滑川市教育委員会が実施した。調査は重機(バックホウ)および人力で地表面まで掘り下げ、造構・遺物の確認、土層堆積状況の記録を行った。調査対象地である幅員5m、延長100mの既設農道にトレンチ6本を設定した。農道は盛土により作られたものである。いずれのトレンチにおいても、約1mの盛土層の下は厚い砂礫層となっており、造構および遺物は確認されなかった。

VI 魚駒遺跡

1 遺跡の位置と環境



図8 魚駒地区および事業計画地 (1:10,000)

魚駒遺跡は、上市川が平野に至り蛇行と氾濫を繰り返して形成した自然堤防上に立地する、弥生時代から中世の遺跡である。河口からは約50~500m上流で、標高は約1~3mと最も低所である。現河川は昭和12・13年の改修工事により直線的となり、遺跡が所在する魚駒地区を分断しているが、それ以前は大きく富山市側へ蛇行していた。したがって、遺跡は本来河川右岸のみに展開していたものと思われる。旧左岸地区では平成6年の試掘調査の結果、遺構も検出されている。一方右岸においては、平成9年には個人住宅建設に伴う発掘調査の結果、中世初期の掘立柱建物や井戸が見つかっており、弥生末から古墳時代と中世の良好な遺跡であることが判明している。

なお、平安時代末期の京都・八坂神社文書にある『祇園社記』には、康治元年(1142)に宮道季式なる人物が祇園社に私領を寄進して成立した莊園「堀江莊」の中の一村として、現在の「魚駒」地区にあたる「伊達乃見村」の名が記載されているが、平成9年の調査結果は文献史料を裏付ける資料となった。

2 調査経過

今回の調査は、平成9年度から継続して実施している(仮称)魚駒東地区土地区画整理事業に伴う試掘調査である。区画整理事業計画地は上市川右岸の滑川市魚駒地内で、市道富山滑川線とJR北陸本線とに挟まれた区域、約212,000m²である。

魚駒遺跡の範囲は、上市川左岸については平成6~8年度の試掘調査において概略が把握されていたが、上市川右岸については、平成8年に個人住宅建設に伴い、上市川から約100m東の県道沿いの一角で試掘調査を実施した(平成9年に本調査を実施)のみであり、遺跡範囲の把握はされていなかった。そのため教育委員会では、滑川市建設部都市開発課と事前協議を重ね、まず計画地内の遺跡分布調査を平成9年10月に実施した。その結果を受けて約80,000m²を対象範囲として試掘調査を実施することとした。現地の土壤が軟弱であることから、調査方法はいわゆる坪掘り方式とし、おまかに50mメッシュごとに2m×2mのトレンチを設定することとした。調査地の軟弱な地盤や小区画の水田が多いこと、移動路の狭さ等から小型の重機(バックホウ)を使用して遺構面まで掘り下げ、その後人力により遺構精査し、遺構および遺物の遺存状況を記録することとした。平成9年度の第1次調査は平成9年12月16日から12月29日にかけて、滑川市教育委員会を調査主体として実施した。積雪等もあって調査は未了に終わったが、調査した31地点をもって概ね遺跡範囲は把握することができた。

今年度の第2次調査は遺跡範囲を絞り込んだためのもので、前年度に判明した遺跡推定地周辺を対象範囲として調査することとした。対象地に25m間隔でトレンチを設定し、平成10年11月4日から11月10日にかけて、同様の方法で実施した。16地点の調査で終了した。

3 遺構・遺物

魚駒遺跡の基本層序は、①層：表土(耕作土)、②層：黄褐色土、③層：暗灰褐色土、④層：暗茶褐色土、⑤層：黒色粘質土、⑥層：青灰色砂質土ないしシルト層(地山)となっている。地表から地山までは約1~1.5m前後の深さがある。そのうち⑤層は弥生末から古墳時代の包含層であり、③層は中世の遺物包含層である。

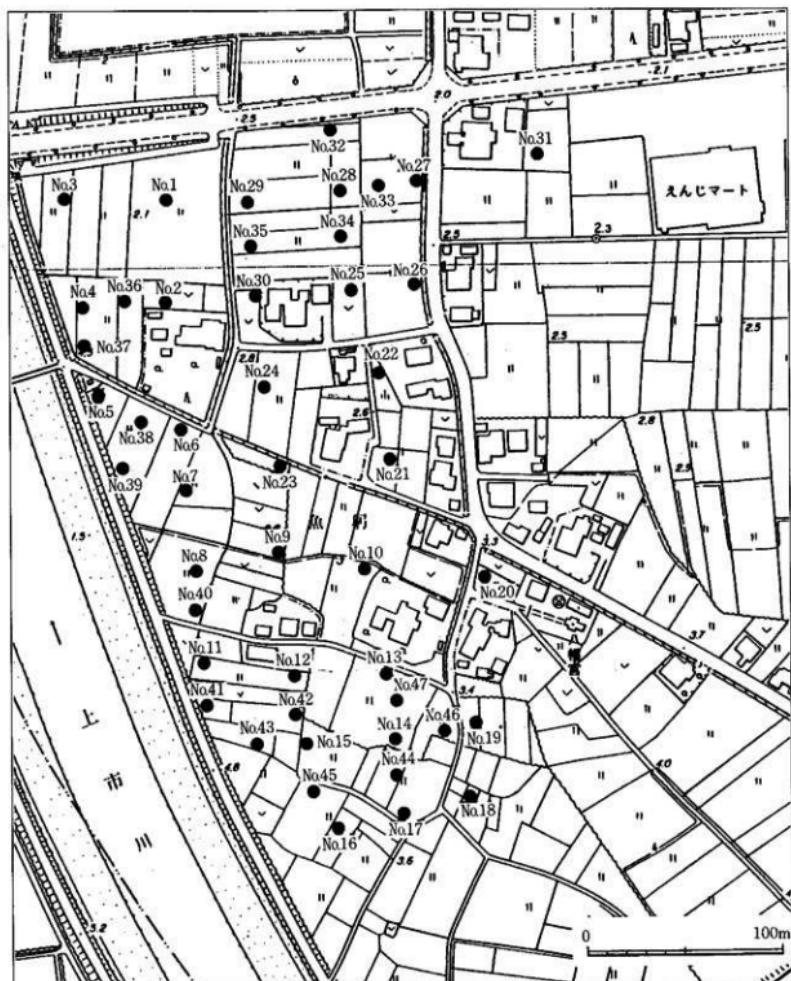


図9 魚飼遺跡 試掘地点 (1:2500)

魚飼集落西部区域においては、表土直下に古代および中世の遺構面が存在する箇所もあった。

各調査地点での検出遺構は別表とのおりである。検出遺構には、土壤、溝、柱穴があり、時期・性格等不明なものもある。各地点は距離的に離れているため、出土遺構間の関連は不明である。

No.1は平成9年度に実施した個人住宅地の本調査において中世の掘立柱建物が検出された地点の南に隣接している。この遺構はその掘立柱建物から連続する柱穴と考えられる。直径は約30cmである。No.2の遺構も層位的にみてこの掘立柱建物に関連するかあるいはそれと同時期のものと思われる。No.11は2層にわたって溝が重複している。

No.	現況	検出遺構	出土 遺物	備考
1	田	柱穴	土師器	中世
2	休耕田	穴	土師器	中世
3	休耕田		土器	弥生～古墳
4	田		土器	時期不明
5	田		土器	弥生～古墳
6	田			
7	田			
8	田			噴砂痕
9	田	穴	須恵器	
10	休耕田		土師器？・珠洲	
11	田	溝	土師器	
12	田			噴砂痕
13	田	溝	珠洲	
14	田	杭列	須恵器・土師器・白磁	古墳・古代
15	田	穴	土師器・綠釉	
16	休耕田			
17	田			
18	休耕田			
19	田		陶器(鉢)	
20	田			
21	休耕田			
22	雜種地			
23	雜種地		土器	時期不明
24	田	穴	土器	

No.	現況	検出遺構	出土 遺物	備考
25	畑		土器	
26	田			
27	田		土器	
28	田		土器・珠洲	弥生～古墳
29	田		珠洲・近世陶磁	
30	畑		土器	古墳？
31	田			
32	田	穴	土器	弥生～古墳
33	田		土器	弥生～古墳
34	田		土器	弥生～古墳
35	田		土器・珠洲	
36	田			
37	田		土器・土製支脚	弥生～古墳
38	田			
39	田		須恵器	
40	田		土師器	古墳
41	田	穴(3)	須恵器・土師器	
42	田	穴(3)	須恵器・土師器(古代)・低石?	
43	田	溝(3)	須恵器・土師器・青磁・白磁陶	平安・中世
44	田	石塁水路	越中瀬戸・越前・染付	近世
45	田	溝・穴	土器・土錐・須恵器	
46	田		土器	時期不明
47	田	穴	陶器	近世

(注) 遺構と遺物は共伴関係を示すものではない。

表1 魚飼遺跡 地点別出土遺構・遺物一覧

出土遺物が少ないが、層位などから上層は古代、下層は弥生から古墳時代のものかと考える。No.14は地表下約1mで黒色土遺物包含層とともに、径5cmほどの坑かと思われる木数本が出土している。遺物は、ロクロ成形土師器輪・皿・大型蓋・須恵器杯蓋(古墳時代)、白磁玉縁口縁碗が出土している。遺構の規模・性格等は不明である。No.15では綠釉輪底部が出土した。No.41~43では、表土直下で遺構を検出した。No.43では黒色覆土の古代溝と白色砂の中世溝が、同一面で検出された。遺物は須恵器、土師器、青磁、白磁等が出土している。

なお、No.44からは近世の石組水路とみられる遺構が出土し、覆土および裏込め土から越中瀬戸皿片、染付片が出土している。

4 小結

2次にわたる試掘調査の結果から魚飼遺跡範囲を推定すると、事業計画地における遺構・遺物分布の中心は大きく魚飼集落北西部と西部の2つの区域にある。時期別の遺跡推定範囲として示すと第11図となる。北西部は從来から知られている魚飼遺跡から連続する、弥生末～古墳時代と中世の複合遺跡である。中世については、先の本調査地点を中心に良好に遺構が存在する。弥生末～古墳時代は未だ遺構が検出されていないが、土層の堆積や遺物の出土状況から、今後発見される可能性が高い。

西部については、北西部と連続することも考えられるが、魚飼遺跡とは別個の古墳時代・古代・中世の複合遺跡である可能性が高いものと思われる。さらにこの地域では部分的に近世の遺構が存在している。遺構の出土層位の状況が地点によりかなり異なっており、各地点の出土遺構の関連性および遺跡の立体的な復原が当面の課題となる。



図10 魚駒遺跡 時期別推定範囲



魚駒遺跡



魚骨遺跡 1 №.1 層位 2 №.11 遺構(下層) 3 №.43 遺構 4 №.14 遺物出土状況 5 №.28 遺物出土状況
6 №.41 遺物出土状況 7 №.3・14・15・28 遺物 8 №.40・41・42 遺物

VII 千鳥遺跡

1 遺跡の位置と環境



図11 千鳥遺跡調査位置図(1:10,000)

滑川市の南東部には隆起扇状地である台地状の地形が形成されていて、いくつかの小河川によって開拓された「加積山麓階」と呼ばれる台地群で構成されている。その中の一つであるいわゆる「室山野台地」の最奥部に、千鳥遺跡は位置する。標高は約250mであり、遺跡のすぐ北側は低位の台地へ続く崖面、南東は丘陵地となっている。

大正15年刊行の早川莊氏著『越中石器時代民族遺跡遺物』にすでに記載されるなど、当地も早くから知られていた遺跡で、昭和31年には滑川市最初の学術発掘調査が実施されている。このときの調査において、3基の石組炉や柱穴とともに、多数の土器や石器、獸骨片が出土したため、その後、調査地は滑川市が市有地化して市指定史跡となっている。昭和46年にも圃場整備に伴い、

史跡隣接地での試掘調査が実施された。これまでの調査では、竪穴住居跡は見つかっていないが、縄文中期を中心とした中期前葉から晩期までの遺物が豊富に出土するとともに、特殊な遺物も確認されている。

2 調査経過

調査地は滑川市千鳥字村巻地内で、市指定史跡地とは室山野用水を挟んで隣接地となる。史跡地および調査地は周囲より高くなっている、調査地内でも249.0m～250.7mと高低差がある。周囲の水田は既に圃場整備が行われている。調査地については圃場整備から外れているが、土地所有者は自主的に若干改変を加えているという。現状は畠であり、地点によっては畦畔や法面を中心に土器・石器が多数表面採集でき、遺跡が良好に保存されていることが容易に推察される。

今回の調査は、土地所有者から今後の土地利用の参考とするための試掘調査依頼があり、遺跡範囲と性格の把握を目的として実施したものである。調査は平成10年12月1日から14日かけて滑川市教育委員会が行った。

調査は、埋設管を外すよう対象地の畠中に任意にトレンチを設定し、東側から西側へ向かって進行していく。地表面での遺物の散布状況から、重機を使用せず、表土より人力で掘り下げるこことし、精査の上、遺構および遺物の遺存状況を記録した。包含層の全掘を目標としたが、一部のトレンチについてはサブトレンチ内での全掘にとどめた。また遺構は確認のみで覆土の発掘はしていない。

3 遺構・遺物

遺構

層序は基本的に①層：黒褐色表土（耕作土）、②層：黒灰色土、③層：黄褐色ロームとなっている。遺物包含層は②層であるが、一部に見られる表土との間の暗赤褐色土にも遺物が散布している。遺構はローム面に掘り込まれており、包含層の見られない地点もある。遺構面までは浅い地点で地表下20cm、最大で約1mとなっている。

対象地における遺構の分布状況は、北東の最高所ではほとんど確認されないなど、全般に北側の区域は少なく、一方南側の一段低い区域は、竪穴住居跡等の分布は濃密である。

竪穴住居跡 19トレンチで竪穴住居跡が1棟検出された。北端の一部であるが、ほぼ円形の平面形態である。直径は6m前後とみられる。遺構発掘はしていないため、壁の立ち上がり高は不明である。遺構北東部からは南西方向に幅約30cmの溝が延びている。

明確ではないが、1・18トレンチの遺構も竪穴住居跡の可能性がある。この他、掘り方は確認できなかったが、遺物の集中度からみて2・16トレンチおよび周辺にも存在する可能性がある。

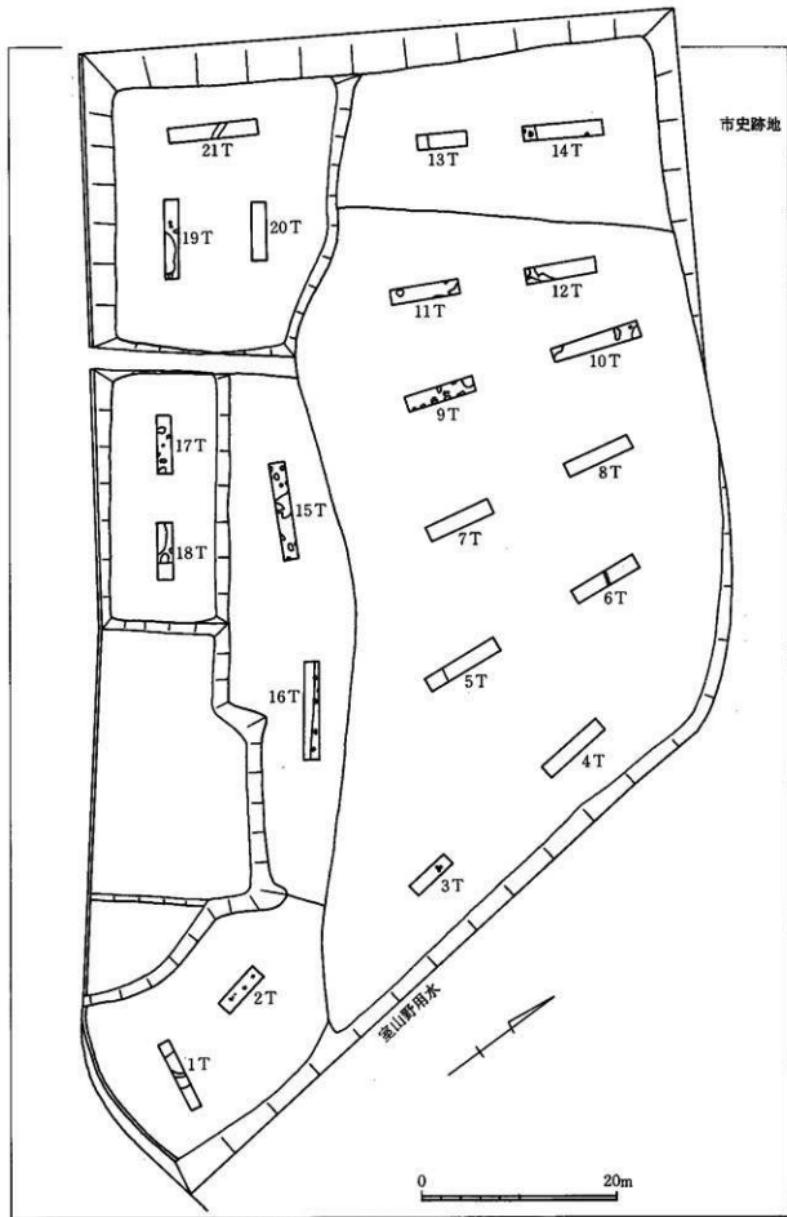


図13 千鳥遺跡 遺構分布図 (1:500)

その他 土壌・ビットの類が5・9~19トレンチで多数見つかっている。溝は6・21トレンチでみつかっているが、覆土の状況から近現代のものかと推測される。

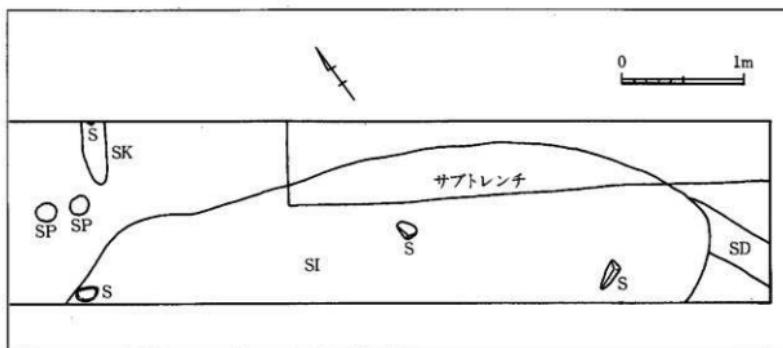


図14 千鳥遺跡 19トレンチ堅穴住居跡 (1:20)

遺物

遺物は対象地域のはば全域から出土しているが、特に遺構が存在する地点からは大量に出土している。出土遺物には、縄文土器、石器がある。

縄文土器 縄文中期前葉から後期にかけての土器が出土しているが、特に中期後葉、串田新式に属するものが量的に多い。ほぼ全域に見られるが、特に15~17トレンチあたりから濃密に出土している。中期のものは、新略式に属するものが19トレンチ、天神山式に属するものが3トレンチあたりを中心に一定量見られる。後期の気屋式から井口式が2トレンチを中心で出土している。この他若干後期後半のものも出土している。

器形は深鉢が圧倒的である。後期の台付鉢、浅鉢が僅かにある。特殊なものとしては、吊手土器の吊手頂部、土製円盤、線刺入りの有孔球状土器、赤彩土器、有孔鉢付土器、小型土偶がある。

石 器 石器は、打製石斧、磨製石斧、石皿、石棒、凹石、石錐、擦石等がある。打製石斧が最も多い。磨製石斧は蛇紋岩系が最も多く、他にチャート系、砂岩系の未製品もある。

この他、石錐、磨製石斧、打製石斧が表面採集されている。

4 小結

今回の調査地は、周辺の状況等から良好に遺構・遺物が存在することが推測されていたが、実際に堅穴住居跡を含め良好に遺構・遺物が遺存していることが確認された。対象地域での遺構分布の確認を目的としていたため不十分であったが、堅穴住居跡については詳細に調査すれば、さらに発見される可能性が高い。遺構・遺物はほぼ全域から出土したが、対象地の一角にある納屋の周囲は濃密であった。逆に、北東の室山野用水に近い地点はほとんど遺構は見られなかった。

千鳥遺跡は、昭和31年の調査時に堅穴は見つかっていないが、石組炉や柱穴は検出されており、堅穴住居跡が存在することは確実である。さらに今回の調査で、堅穴住居跡をはじめ遺構の分布状況についての新資料が得られたことにより、千鳥遺跡の聚落構造をある程度検討できるものと思われる。

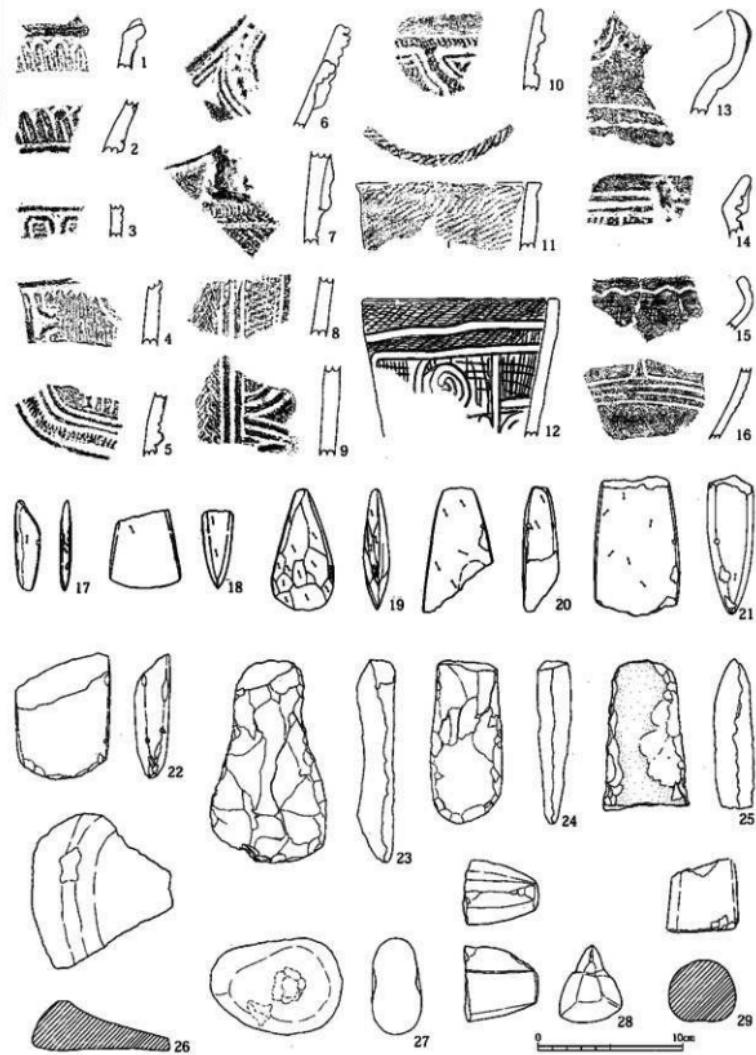
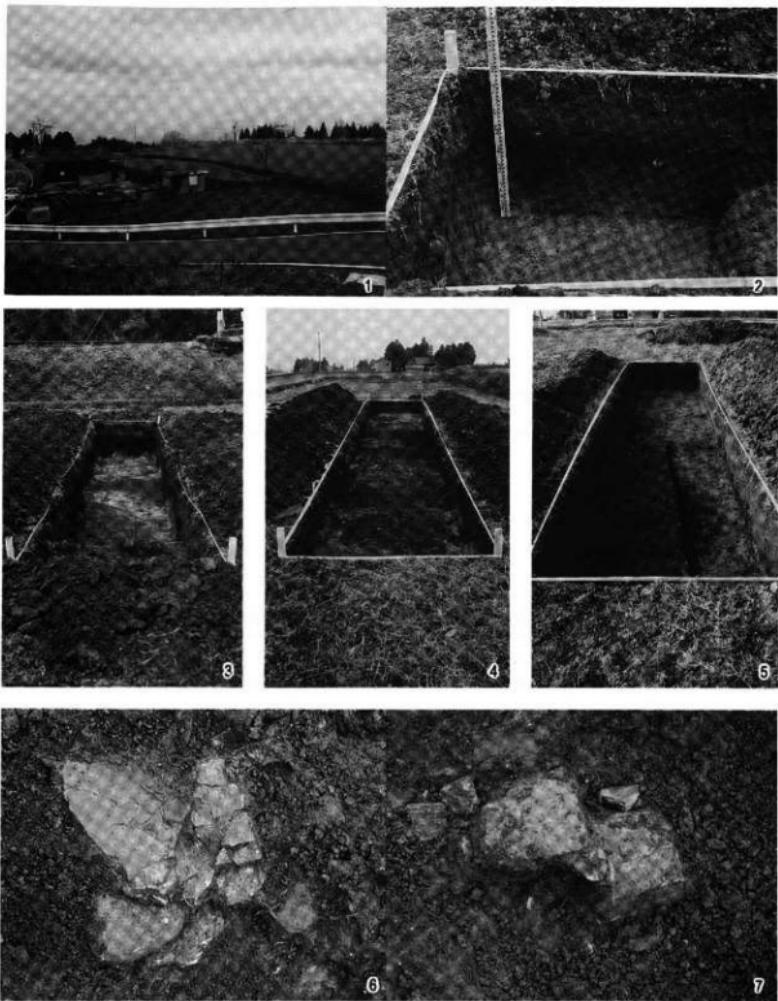


図14 千島遺跡 土器拓本図・実測図 石器実測図 (1:3)

(1:3~16:20・26:28:15トレンチ 18:12トレンチ 19~24:17トレンチ 21:1トレンチ 22~27:16トレンチ 23:7トレンチ 29:21トレンチ)



千鳥遺跡 1 調査地近景 2 基本層序 3 1トレンチ遺構 4 15トレンチ遺構 5 19トレンチ遺構
6 2トレンチ遺物出土状況 7 16トレンチ遺物出土状況



1



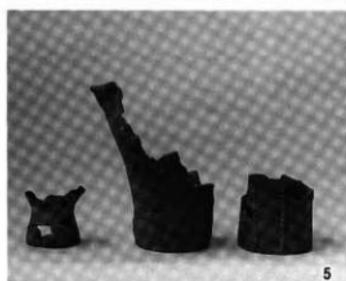
2



3



4



5



6



7



8

千島遺跡 出土遺物 1・2 2トレンチ 3・4・5・16トレンチ、
表探 8 1・2・12・15・16・17トレンチ
6 16・20トレンチ 7 7・12・15・16・18トレンチ、

報告書抄録

ふりがな	なめりかわしまいぞうぶんかざいはつくつちょうさがいほう						
書名	平成10年度滑川市埋蔵文化財発掘調査概報						
編著者名	野末 浩之						
編集機関	滑川市教育委員会						
所在地	〒936-0056 富山県滑川市田中新町39-4 TEL 0764-75-2111						
発行年月日	西暦 1999年3月31日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯 °'"	東經 °'"	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
上梅沢館跡	滑川市 上梅沢	16206 206013	36° 44' 33"	137° 21' 40"	19980511	45.8	個人住宅建 設に伴う本 調査
上小泉西遺跡	滑川市 上小泉	16206 206055	36° 45' 20"	137° 20' 58"	19980721 (対象面積)	1,106	宅地造成に 伴う試掘調 査
森野新館跡	滑川市 森野新	16206 206018	36° 45' 00"	137° 23' 56"	19980925 (対象面積) 19980928	620	倉庫等建設 に伴う試掘 調査
上梅沢遺跡	滑川市 上梅沢	16206 206051	36° 44' 22"	137° 21' 13"	19981016 (対象面積)	1,653	宅地造成に 伴う試掘調 査
寺町遺跡	滑川市 寺町	16206 206015	36° 43' 31"	137° 22' 07"	19981030 (対象面積)	250	農道舗装工 事に伴う試 掘調査
魚飼遺跡	滑川市 魚飼	16206 206008	36° 45' 13"	137° 19' 22"	19981104 (対象面積) 19981110	9,157	土地区画整 理事業に伴 う試掘調査
千鳥遺跡	滑川市 千鳥	16206 206042	36° 44' 13"	137° 25' 18"	19981201 (対象面積) 19981214	3,460	遺跡範囲確 認試掘調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
上梅沢館跡	城館跡	中世	溝、穴	珠洲、越中瀬戸			
上小泉西遺跡	集落跡	古墳・中世	溝(近現代)	珠洲、越中瀬戸			
森野新館跡	城館跡	中世		珠洲			
上梅沢遺跡	散布地	平安・中世					
寺町遺跡	集落跡	古墳・古代・ 中世					
魚飼遺跡	散布地	弥生・古墳・ 古代・中世	穴、溝(平安・中世)	土師器、須恵器、青磁、白磁、 珠洲、越前、越中瀬戸			
千鳥遺跡	集落跡	縄文(中・後 期)	堅穴住居、穴	縄文土器、石器(石斧・石 皿・凹石等)			

平成10年度滑川市埋蔵文化財発掘調査概報

平成11年3月

編集・発行 滑川市教育委員会

印 刷 飯坂印刷

